

聖書：ルカの福音書 11 章 37～44 節

説教題：どこを見るのか

1 パリサイ人

新約聖書の時代、イスラエルには旧約聖書の解釈や考え方の違いから、いくつかの宗教グループが存在していました。その一つがパリサイ派です。彼らは、旧約聖書に書かれている律法を文字通りに守ることを強調します。今のことばで言えば原理主義的な教派と言えるでしょう。

そのパリサイ人がイエスをどのように評価していたか。たとえばこんなことがありました。イエスはパリサイ人から罪人と呼ばれていた人たちを食事に招き、一緒に食事をしたとき、彼らはこう言うのです。「なぜ、あなたがたは、取税人や罪人どもと一緒よに飲み食いするのですか。」またある安息日のことでしたが、お腹が空いた弟子たちが、通りかかった麦畑に入り麦の実を食べたとき、こう言います。「なぜ、あなたがたは、安息日にしてはならないことをするのですか。」

このように、イエスとパリサイ人はいつも衝突しています。当然良い感情を持つはずはありません。それなのに、ここではパリサイ人がイエスを食事に招待します。何かの魂胆があったのだらうと考えられます。

食事の前に、パリサイ人はしきたりに従い、丁寧に手を洗いきよめます。ところがイエスはそのようなことはいっさいしません。パリサイ人はこれを見て、驚いたとあります。

なぜイエスは食事の前に手を洗わなかったのでしょうか。今の時代なら、衛生上の理由

で食事の前に手を洗う習慣があります。パリサイ人が非難するのも同じ理由からかと思うかもしれませんが、そうではありません。37節に「きよめの洗い」とあるように、衛生的な理由から洗うのではなく、からだをきよくすることを意識して手を洗うのです。からだをきよくしてからでないで食事をすることはできない。それがパリサイ人の考えでした。念のために言いますが、旧約聖書にはそのような律法は書かれていません。確かに、「きよくなければ食べてはならない」という箇所もあります。でも、それは非常に限られた場合のことです。ところが、パリサイ人はそのような箇所を拡大解釈し、どんな場合でもとにかくからだをきよくしてからでないで食事をしてはならないと考えていました。

パリサイ人を弁護するようなことを言いますが、彼らの最初の動機は間違っていたわけではありません。神は聖い方なのだから、私たちは汚れのなかにいるのではなく、いつもきよい者でなければならない。純粋な動機から出発したのです。しかしいつの間にか、何かかすり替わり、神の真理から離れてしまいました。

2 外側と内側

イエスは非常に厳しいことばでそのことを指摘します。39節。「なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や大皿の外側はきよめるが、その内側は、強奪と邪悪とでいっぱいです。愚かな人たち。外側を造られた方は、内

側も造られたのではありませんか。」

私はこれまで何度も失敗してきたことなのですが、何か問題が起きると、目に見える現象がすべてであると考えてしまう弱さがあります。

弟子たちも同じ弱さを持っていたようです。弟子たちがイエスといっしょに舟で移動していたとき、湖の真ん中で昼食のパンがないことに気がつきます。すぐに議論が始まりました。だれが悪いのか、犯人捜しです。問題が起きたことの原因は、ひとえに食事系の怠慢であると信じて疑いません。そんな弟子たちにイエスはこう言われます。「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい。」「あなたがた。信仰の薄い人たち。パンがないからだなどと、なぜ論じ合っているのですか。」(マタイ 16 章 6,8 節)

問題が起きたときに、真に見るべき所はどこなのか、イエスは弟子たちには見えなかった視点に目を向けさせます。弟子たちは食事係がすべての問題の根源と見るけれども、実は真の問題はあなたがたの心の内にあるのではないかと注意を向けさせます。そのことをイエスは、「パリサイ人やサドカイ人たちのパン種」と表現しています。

外側は、すぐに目に見えます。外側だけを見てすべての問題を把握したかのように思い込みます。しかしイエスは言います。「外側を造られた方は、内側も造られたのではありませんか。」言われてみればそのとおりです。外側があるなら必ず内側もあります。内側はすぐには見えるわけではありませんが、だからと言って存在しないのではない。すぐには見えなくても、あることは確かです。問題の本質を正しくつかむためには、外側と同時に内側も見なければならぬ。冷静に考え

れば、そういうことになります。

3 どこを見るのか

(1) 外側だけを見る

しかし私たちの生き方のこととなると、この常識はあやしくなります。外側だけを重視し、内側はほとんど見ない。とにかく見える部分にこだわるが多くなります。

パリサイ人はその典型です。彼らは会堂で一番良い席に座ることにこだわっていました。人が大勢集まる所で、「先生はすばらしい」と言われることを心地よいと感じていました。皆さんの周りにも、これと似たような人を一人や二人すぐに思い浮かべることができるでしょう。

身内の話で恥ずかしいのですが、数年前に私の甥が結婚式を挙げたとき、親族の席順のことでクレームがついたのだそうです。「自分をこんな末席に座らせるとはなにごとだ」と言うのです。そのことで姉は体調を崩すくらい悩んだと後から聞かされました。

(2) 内側を見る

パリサイ人たちは、目に見える行いに関しては非常に熱心な人たちです。収穫物の十分の一をきちんと納め、律法を守ることににおいては文句のつけようがありません。世の基準であれば、最高の賞賛と栄誉が与えられる行いです。しかしイエスの基準から見るとその評価は正反対です。内側をまったく見ようとしていなかったからです。

ところで今、内側と言いましたが、いったい内側の何を見ようとしていないと言っているのでしょうか。42 節後半にその答えがあります。「公義と神への愛はなおざりにしています。」

「公義」とは神の正しさを指します。神の正しさと神への愛、これが内側ということばが指し示す具体的な内容です。でも不思議です。最初に申し上げたとおり、パリサイ人はもともと神の正しさに立ちたいと願っていた人たちであり、神への愛を大切なものと考えていた人たちです。そんな人たちがなぜこんなふうで最初の思いとはまったく遠いところに離れてしまう結果になるのでしょうか。

私は、このことを考えるのは非常に大切なことだと感じております。というのは、これは二千年前の話ではなく、今のこの時代にも十分に起こりうることだと思うからです。

パリサイ人、律法学者、祭司長。いずれも聖書の知識や実践においては専門家、プロと呼ばれる人たちです。そんな人たちが、イエスを十字架に追いやります。聖書知っているから大丈夫。祈っているから間違えることはない。もちろん、聖書の知識や祈りは大切です。でも、それは私たちがパリサイ人にならないという保障にはならない。牧師も教会も同じことをしてかす危険は十分にあります。

神を愛そうとする最初の熱心が、いつの間に別のものにすり替わることがあります。熱心さのあまり、内側のことではなく、外側のことばかりに目が行ってしまうことがあります。すぐに誤りに気がつくことができたら幸いです。でも、まったく気がつかないでいることがしばしば起こります。

4 内側にあるものをささげていく

(1) あわれな状態

パリサイ人に対するイエスのことばは、39節から44節まで続きます。そのなかで何度

も「わがわいだ」ということばが繰り返されています。ここまで激しい表現をされるのはなぜでしょう。見方を変えれば、イエスがどこをご覧になる方であるのかを示しているということではないですか。神は私たちの外側だけを見ているのではなく、内側になにかあるかをご覧になっているのです。

その内側のことについて、イエスは41節で不思議な表現をされます。「とにかく、うちのものを施しに用いなさい。」

でも内側にあるものはなんでしょう。マルコの福音書7章21～23節にこうあります。

「内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、よこしま、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

内側には一つも良いものはありません。それを施しに用いなさいと言うのです。このことばを真剣に受けとめようとするなら、どうなりますか。施すというのなら、良いもの、最良のものをささげなければなりません。けれども自分の内側には良いものは一つもない。どうしても、そこに気がつかざるをえなくなります。

そうすると、イエスはこう言おうとしていることになりませんか。「あなたの内側にあるものこそ、施しを必要なほどあわれな状態ではないのか。」

(2) きよくされていく歩み

内側はあまりにもひどい状態です。墓穴のようなものです。そんなところを見たくありません。なんとかして目をそむけようとしませう。ところが、主はすでに見ておられるのです。ただ見ているのではない。すでに墓穴の

ようなところに降りてくださいました。そこで十字架におかかりになり、罪と汚れのいっさいをこの方が背負ってくださるので

す。
私たちはどこを見ていたのでしょうか。美しく、汚れのないすばらしい場所に立っているイエスを想像したのでしょうか。いつもそういう場所に目を向け、イエスを捜していたのでしょうか。でも、そんな場所にはおられません。この方は、私たちの内側におられます。施しが必要なほどあわれな場所におられます。

もし内側に目を向けることができたなら、どんな事が起きるでしょう。主は言われます。「とにかく、うちのものを施しに用いなさい。そうすれば、いっさいが、あなたがたにとってきよいものとなります。」

この方が私たちが内側からきよくして下さろうとしています。主がすでにおられるのですから、恐れずに主のおられるところに目を向けていきたいと願います。